

職人であると同時に デザイナーとして励む

貴金属工芸は日本刀と同じ鍛金の技法

人は古くから指輪、イヤリング、ネックレスなどの貴金属や宝石で身を飾っていました。当然、貴金属を加工する技術も古くからありました。金属に熱を加えて溶かし、槌などで叩き、伸ばしたり形を整える技法を鍛金といい、4000年以上の昔からメソポタミアや古代エジプトなどでもおこなわれてきました。日本に大陸から金属文化が伝わったのは弥生時代だとされ、古墳時代から鍛金の技法によって、さまざまなものがつくられるようになったようです。時には茶道具や仏具、また装飾品や日本刀にも鍛金の技法が使われました。

明治維新によって武士が廃止されると共に、刀剣の鑢つばなどをつくっていた人は鍛金などの技法を使い、帯留、髪飾などをつくるようになりました。その後、海外の宝石や国産の真珠を使った装身具といった貴金属工芸品を一般の人も身につけるようになっていきました。

身体で覚えた技術だからできる優れた工芸品

戦争中は贅沢品としてつくることも販売することもできませんでしたが、昭和30年代になりプラチナ



や金、宝石が再び輸入できるようになり、業界は発展をはじめます。昭和37年に愛知県貴金属



工芸品商工協同組合が設立され、昭和38年からは組合主催のジュエリーコンテストを開催するようになりました。ところが



バブル経済の崩壊やその後の世界不況と共に、宝石の売れ行きはあまりかんばしくありません。宝石に替わってビーズやクリスタルのアクセサリーが増えているのも現実です。しかし古代より、装身具としての貴金属工芸品はいろいろな場所で使われてきました。特に宝石はいつの世にあっても女性にとっては憧れで、結婚の時などは必需品です。優れた技術はもちろんのこと、デザインの良さがますます重要になっています。組合員の多くは昔ながらの手づくりにこだわっています。手づくりの技術は理屈だけでは身に付きません。いわゆる体で覚えなければ本当にいいモノはつくることができません。また、どんなデザインの装身具を身につけるのかは年齢と共に変化します。そこに時代の流行が加わります。これからは職人であると同時にデザイナーであることも求められています。

DATA ■愛知県貴金属工芸品商工協同組合
所在地：北区光音寺町2-49

・昭和37年：愛知県貴金属工芸品商工協同組合設立
・昭和38年：この年から組合主催のジュエリーコンテスト開始